

現代社会における労働組合の存在意義と 今後の展望

本論文では、現代における労働組合の存在意義はどうなっているのか、企業側からの視点、そして労働者側からの視点から考察し、明らかにすることを目的としたものである。

近年、日本では様々な労働問題が浮き彫りになっており、深刻な社会問題となっている。働き方改革をはじめとした改善策を施行するも、なかなか解消されないのが現実である。そこで、筆者は、この厳しい現状において、労働組合の存在に着目した。

研究方法としては、厚生労働省による統計データを用いて、労働組合の実態について分析し、考察した。また、労働組合が機能しなかった事件や事故を取り上げ、考察した。

結果としては、現代社会において、労働組合はあらゆる外的要因によって力を失いつつあるが、多様化する労働形態への適応や少しずつ活性化してきたストライキなどの争議行動によってわずかな光は見えつつあることがわかった。また、福知山脱線事故などの事例から、労働組合の力不足や機能不全が浮き彫りとなり、企業そのものだけでなく、命を守るということに関しても労働組合の問題解決は急務であるということを確認する必要があることがわかった。そのためにも、企業単位だけでなく、より大きな規模の産業別組合などの組織の拡大、また、労働者自身一人一人が労働組合に対する知識や法律の理解をすることが重要だと言える。今後もより一層厳しい状況が予想される中で、労働組合の再生が必要不可欠である。